北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要　第42号
Bulletin of Hokkaido Asai Gakuen College No.42
創立40周年記念号

平成16年３月
March, 2004

北海道浅井学園短期大学部2003年入学者の服装についての調査
―― 着用実態と服装感および仕事に対する姿勢との関連 ――

A Survey on Attire of Students Matriculated to
Hokkaido Asai Gakuen College in 2003
The Relationship between their Clothing Attitudes and
their Viewon Career

高　岡　朋　子　　大信田　静　子　　泉　山　幸　代
Tomoko TAKAOKA　Shizuko OSHIDA　Sachiyo IZUMIYAMA

Ⅰ　緒　　言

服装は非言語伝達情報の一つとしての機能をもつ。性別，年齢，職業，所属，人柄，ひいては美意識までも表し，さらに時代を移す鏡あるいは世相を反映するとも言われている。特に若者層のファッション動向は目まぐるしく変化し，被服産業に大きな影響力をもつ。

1980年代はＤＣブランドがブームになり，後半の「渋カジ」ファッションから今日のカジュアルなスタイルに移行した。「渋カジ」ファッションとは渋谷カジュアルファッションの略で，渋谷周辺に集まる若者のファッションを指した。色も白，黒，グレーが多くベーシックでシンプルなデザインのものを団塊ジュニア世代が流行らせた。90年代前半には「フェミ男」「カマ男」現象として女の子的な男の子が表れ，ファッションに男女差がなくなる例が出現している。またこの頃からアパレル企業が創り出すファッションではない「族」中心のストリートファッションとなり，中学，高校生世代の若年層がファッションリーダーになる。さらに自分流に着こなす新しいファッション感覚が生まれ，古着やフリーマーケットがブームになったのも90年代のことである[1)]。

筆者らは，このようなファッション動向を背景に，短期大学入学生対象に服装に関する調査を10年おきに過去２回行ってきた。'83年には高級志向でブランド品が出回り始め，まわりの規範に従うという同調型の被服行動が得られた[2)]。'93年には着用実態と服装感，仕事に対する姿勢と服装感との関連を検討した。結果，入学式の式服は紺色のスーツが多く，服装感は非同調・非流行的な傾向にあり個性化現象に動いていた。また服装感が独自的な人は，ドレッシイな洋服と個性的な洋服を着用する傾向にあり，仕事姿勢と服装との関連では，仕事を一生続けるとしたキャリア志向の人は，スカートを着用せずにスポーティな洋服を着用する率が高く，服装感は非同調的な傾向にあった[3)] 10年後の今日，学生の服装感がどのように変化してきているかを比較検討する目的で，'93年の調査書を使用した。ただし本学が男女共学となったために，仕事に対する姿勢についてのみ男女別の質問項目とし，男子向けに質問を作成し調査をし

た。結果いくつかの知見を得ることができたので報告する。

Ⅱ　調　査　方　法

調査は2003年４月，短期大学部学生525名，性別には男性123名，女性401名であり内訳は人間総合学科服飾美術系（以下服飾美術）64名，スポーツ科学系（以下スポーツ科学）154名，養護保健系（以下養護保健）80名，経営情報系（以下経営情報）56名，初等教育学科（以下初等教育）127名を対象に質問紙調査法により行った。調査項目は'93年の調査時と同様な質問項目，入学式に着用した洋服のＳＤ法によるイメージ調査（23項目の形容詞対，５段階尺度），式服の実態調査，服装感について（24項目，２件法），日常着についての着用実態（22項目，５段階尺度），働く目的と仕事の姿勢についての他，個人プロフィールである。

方法は単純集計のほか，日常着については因子分析（主因子法，バリマックス回転）と平均値の差の検定を，服装感については度数の差の検定による解析を行った。

Ⅲ　結果および考察

１．入学式の式服についてのイメージ

学生は大学の入学式にどのような服装で出席したのであろうか。式服として着用した服種と金額，色さらに着用した時の気分や式服の活用方法などを質問し，10年前の調査と比較検討をすることを試みた。

着用した式服のイメージを23個の形容詞対を使用しＳＤ法によるイメージ調査を行った結果の平均プロフィールを図１に示す。落ち着いた，すっきりした，改まった，新しいに高い評価がみられ，'93年当時よりも[3]公的な（3.6）がやや高く表出していた。若者の最近の服装はずり下げパンツやシャツをパンツの上に出すなど着こなしにルーズな傾向が見受けられる。そのため，式服として正装をした時には10年前よりも高い公的なイメージを持ったものと考えられる。 また'93年時と比較すると「男っぽいー女らしい」の項目は各科系によりばらつきがみられた。服装は性別に異なり，式服には自分の性別に合致するイメージをもつと思われ，男子が多い各科系と女子が多い各科系では違いが出るのは当然の結果であると推察する。

つぎに全体と各科系との平均値の差の検定を行ったところ有意差が認められたのは，服飾美術には「タイトな」「上品な」「ドレッシイな」の項目に，スポーツ科学には「スポーティな」「特別な」「カジュアルな」「男っぽい」の項目に，養護保健は「カジュアルな」「女らしい」の項目に，経営情報と初等教育は「女らしい」の項目で，総合教養は「上品な」「静的な」「落ち着いた」「おとなしい」「新しい」の項目が平均値よりも低く，また「改まった」の項目は平均値よりも高く有意差が認められた。これらのことから服飾美術はドレッシイな式服を，スポーツ科学はスポーティでカジュアルな式服を，養護保健はカジュアルななかにも女性らしい式服を，初等教育と経営情報は女らしい式服を，総合教養はごく普通なイメージの式服を着用していたと思われる。'93年には体育コースの学生は女子ばかりであったが，式服のイメージはス

ポーティで男っぽく捉えられており，今回の調査でのスポーツ科学は半数以上が男性であるにも関わらずスポーティでラフな式服という同様な結果となり，専攻する分野が同じであると，性別に関係なく同じイメージをもつ服装をすることが伺えた。

2．式服として着用した服種と色について

式服として着用した服種と金額を表1に示す。服種はスーツ，ブレザーとスカート，パンツの組み合わせが多く，アクセサリーとしてはペンダント，ネクタイをつけていた。スーツの平均金額は22,353円，ブレザー14,318円，スカート10,927円，パンツ13,189円であった。式服としてスーツを着用するのは'83年 '93年の過去2回の調査結果と同じであり，礼装としてのスーツ着用は当たり前になっていることがわかる。またスーツの購入金額を比較すると'83年は当時の勤労者一世帯当たりの被服費の1～2月分をかけ，'93年調査時のスーツの平均金額は35,500円と当時の被服費の1月分24,191円のおよそ1.5倍をスーツにかけていた。今回のスーツの購入金額平均は10年前の金額より38%低く，さらに一世帯あたりの被服費は全国平均

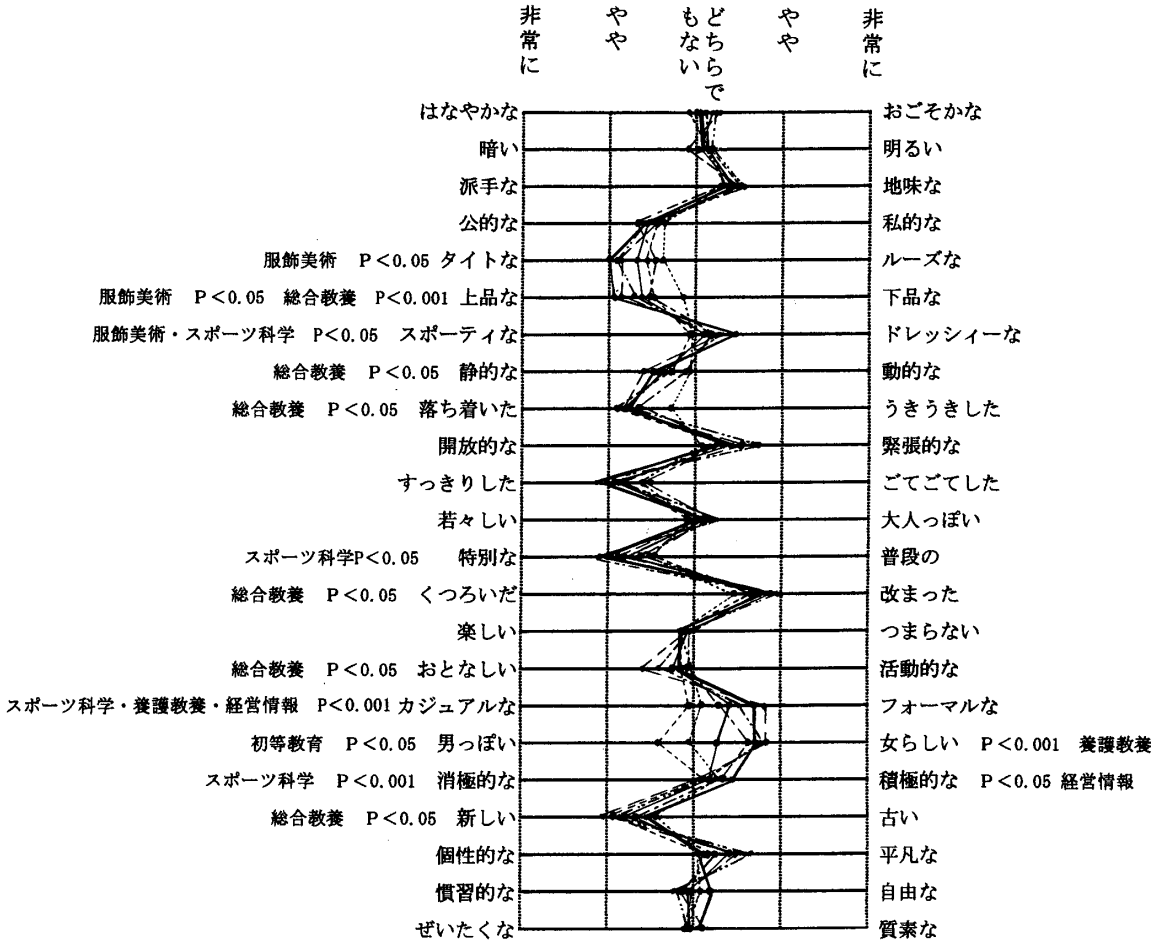

図1　入学式の式服についてのイメージプロフィール（平均評点）

全　体 ———　服飾美術 ━━━
スポーツ科学 - - - - -　養護教養 — — —
経営情報 —·—·—　総合教養 - - - - - - - -
初等教育 —··—··—

14,477円[4]とこれも40%低くなっている。今回のスーツの購入金額は勤労者一世帯あたり被服費の1.5倍と10年前とほぼ同じ割合で購入していることになる。

全国の勤労世帯の被服費は'93年時から'02年まで年を追うごとに低くなる傾向にあり，今回のスーツの購入金額も同様に低く現れている。このようにスーツの購入金額と一世帯あたりの被服費が軽減した理由として，バブル崩壊後のインフレ傾向が低価格につながった[5]ためと衣料品の二極化，すなわち高級品志向と価格破壊とも受け取られる安価なものの，極端な二極化のためと考えられる。

またアクセサリーとして入学時につけていたものは'93年時はイヤリングが23.4%，ペンダントが15.5%とイヤリングが多かったが，今回はペンダントが19.8%，イヤリングが11.6%とペンダントが多くつけられていたが，全体的にはアクセサリーは少ない傾向にあった。

つぎに衣服の印象に大きな影響を及ぼす色についの質問結果を表2に示す。学生に多く着用されていたスーツでは黒が38.8%と最も多く，次はグレー，紺色の順位である。ワンピースは白，ブレザーは黒とグレーが同率で，スカート，パンツはともに黒色が多かった。また上着の下に着る物としてのTシャツは白が多く全体的には様々な服種に黒，白，グレーの無彩色の傾向がみられた。'93年の調査時は紺，グレー，ピンク，ベージュの出現順位で，過去2回の調査でも紺，グレーが多かったが，今回はスーツ，ブレザー，スカートはともに黒が多かった。

さらに普段好んで着る洋服の色を表3に示すと黒が一位で次に白，ピンク，紺の順であった。黒が他の色と組み合わせを得やすい色であること，また被験者の86%は手持ちのものを考えて，洋服を購入していることを考え合わせると好きな色として，黒が一位であることは納得のいくことである。'93年時も好まれる色として黒がえらばれており，黒，白，グレーの無彩色も若

表1　入学式に着用した服種と金額

	N=525（%）	最低金額（円）	最高金額（円）	平均金額（円）
スーツ	451（85.9）	1,200	80,000	22,353
ワンピース	13（ 2.5）	3,000	23,000	11,863
ブレザー	30（ 5.7）	2,900	24,000	14,318
スカート	47（ 9.0）	3,900	30,000	10,927
パンツ	56（10.7）	3,900	40,000	13,189
セーター	4（ 0.8）	5,000	45,000	18,633
Tシャツ	69（13.1）	980	10,000	5,204
スカーフ	4（ 0.8）	5,000	2,000	3,500
ネクタイ	88（16.8）	1,000	14,000	3,682
ブローチ	1（ 0.1）	5,000	5,000	5,000
ブレスレット	28（ 5.3）	300	40,000	11,042
ペンダント	104（19.8）	300	70,000	8,971
髪飾り	5（ 0.9）	1,000	2,000	870
イヤリング	61（11.6）	180	6,500	1,703
外靴	421（80.1）	300	50,000	8,215
バック	298（56.8）	300	110,000	10,421

（注）平均金額は記入数で割ったもの

年層に好まれる傾向にあり[6]，今回も同様に無彩色が好まれていた。渡邉[7]は94～2000年にかけてのパリコレクションの色彩傾向の分析の中で，無彩色は95年に24%出現し，96～2000年の間はつねに14.5%の出現率をキープしており，また95～96年を除き低明度の出現率の割合が高く，経済動向に色の明るさ（明度）が影響されていることを確認している。今回の調査結果で

表2　入学式に着用した式服の色

	科別	服飾美術 N=64		スポーツ科学 N=154		養護教養 N=80		経営情報 N=56		総合教養 N=44		初等教育 N=127		全体 N=525	
	順位	色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)	色	人数(%)
スーツ	1位	黒	32(50.0)	黒	56(36.6)	黒	36(45.0)	グレー	20(35.7)	黒	14(31.8)	グレー	51(40.1)	黒	204(38.8)
	2位	グレー	20(31.2)	グレー	40(26.0)	グレー	26(32.5)	黒	17(30.4)	グレー	14(31.8)	黒	49(38.6)	グレー	171(32.6)
	3位	紺	4(6.3)	紺	34(22.1)	紺	8(10.0)	紺	8(14.3)	紺	7(15.8)	紺	11(8.7)	紺	72(13.7)
	4位	グリーン	1(1.6)			ベージュ	1(1.3)							茶・ベージュ	1(0.2)
	5位	茶	1(1.6)											グリーン	1(0.2)
ワンピース	1位	黒	1(1.6)	グレー	1(0.6)	白	1(1.3)	黒	1(1.8)	白	1(2.3)	グレー	1(0.8)	白	4(0.8)
	2位	ピンク	1(1.6)	青	1(0.6)			白	1(1.8)			茶	1(0.8)	黒・青	2(0.4)
	3位							青	1(1.8)			水色	1(0.8)	グレー	2(0.4)
	4位											グリーン	1(0.8)	茶・水色	1(0.2)
	5位											白	1(0.8)	グリーン	1(0.2)
ブレザー	1位	白	1(1.6)	黒	1(0.6)	黒	4(5.0)	黒	1(1.8)	グレー	1(2.3)	グレー	6(4.7)	グレー・黒	10(1.9)
	2位	グレー	1(1.6)	白	1(0.6)	白	1(1.3)	白	1(1.8)	水色	1(2.3)	黒	4(3.1)	白	4(0.8)
	3位	ベージュ	1(1.6)	グレー	1(0.6)	グレー	1(1.3)					茶	1(0.8)	紺・茶・青	1(0.2)
	4位			紺	1(0.6)									ベージュ	1(0.2)
	5位			青	1(0.6)									水色	1(0.2)
スカート	1位	グレー	1(1.6)	黒	14(9.1)	黒	3(3.8)	グレー	8(10.3)	黒	1(2.3)	グレー	8(6.3)	黒	23(4.4)
	2位	ベージュ	1(1.6)	グレー	5(3.2)	グレー	1(1.3)	黒	5(8.9)	白	1(2.3)	黒	5(3.9)	グレー	18(3.4)
	3位			紺	2(1.3)			紺	1(1.8)	グレー	1(2.3)	紺	1(0.8)	紺	3(0.6)
	4位													ベージュ	1(0.2)
	5位													白	1(0.2)
パンツ	1位	ベージュ	1(1.6)	黒	17(11.0)	黒	1(1.3)	黒	6(10.7)	紺	1(2.3)	黒	2(1.6)	黒	25(4.8)
	2位			グレー	12(7.8)	グレー	1(1.3)	グレー	3(5.4)			グレー	1(0.8)	グレー	17(3.2)
	3位			紺	11(7.1)									紺	12(2.3)
	4位													ベージュ	1(0.2)
	5位														
セーター	1位	白	2(3.1)			グレー	1(1.3)							白	2(0.4)
	2位													グレー	1(0.2)
	3位														
	4位														
	5位														
Tーシャツ	1位	白	5(7.8)	白	7(4.5)	白	6(7.5)	白	3(5.4)	白	3(6.8)	グレー	3(2.4)	白	24(4.6)
	2位	水色	4(6.3)	水色	5(2.6)	水色	1(1.3)	ピンク	2(3.6)	青	1(2.3)	黒	2(1.6)	水色	12(2.3)
	3位	ピンク	2(3.1)	黒	4(2.6)	青	1(1.3)	紺・青・黄	1(1.8)	ピンク	1(2.3)	水色	2(1.6)	ピンク	8(1.5)
	4位	黒	1(1.6)	グレー	3(1.9)	ピンク	1(1.3)	ベージュ	1(1.8)			ピンク	2(1.6)	黒	7(1.3)
	5位			青	3(1.9)			グリーン	1(1.8)					グレー	6(1.4)

表 3　好んで着る洋服の色　（複数回答）

順位	服飾美術 色	人数	スポーツ科学 色	人数	養護教養 色	人数	経営情報 色	人数	総合教養 色	人数	初等教育 色	人数
1位	黒	44	黒	85	黒	44	黒	41	黒	20	黒	74
2位	白	31	白	56	白	39	白	28	ピンク	19	白	51
3位	ピンク	20	青（紺）	48	ピンク	20	青（紺） 茶 ベージュ	15	白	16	青（紺）	24
4位	青（紺）	13	グレー 茶	29	赤	13	ピンク	9	緑	10	赤	20
5位	茶	10	ベージュ	8	青（紺）	13	黄	8	茶	9	グレー	18

も若者に無彩色が好まれているのは，インフレ社会を反映しているからであろう。

3．入学式の洋服を着用した時の気分と活用方法

行事等，式服を着用したとき何らかの心理的作用を伴うが，入学式に望むにあたり式服を着用した時の気分を質問した。その結果を表4に示すと，大人になった気分が42.5%，つぎに引き締まった気分が33.5%，両方で76%と大半を示した。'93年調査時では1位が引き締まった気分35.8%で今回と数値の変化はさほど見られないが，28.3%と2位だった大人の気分が今回は高く表出した。着用している服種の大半はスーツであり，色彩も黒が主流であることから，高校時の服装と全く異なり，次の年代の衣服として捉えていることが推測される。また晴れやかな気分は前回が15.6%に対し，今回は6.3%と半分以下の数値であることから，入学式の式服着用の気分を総体的にみると前回は式典という外的要因の影響が表われていたのに対し，今回は自分の内的心理作用が大きかったことが伺える。

次に今後の式服の活用方法を表5にみると就職時のリクルートスーツが前回17.1%に対し今回54.7%と圧倒的に多く，就職活動用の服装の定着が読取れることになった。また街着（前回29.6%に対し今回2.1%，通学服（前回15.7%に対し今回0.8%）の数値の極端な変化は，服装がよりカジュアル化して来ているためと推察出来る。

4．入学生の服装感についての考察

時代を写す鏡としてのファッションを動かすのはいつも若者である。どのような服装感をもってこれからの衣生活を過ごすのであろうか'83年時にはブランドブーム現象が現れ，服装に対してやや同調傾向がみられた。'93年時には，非同調型の服装感が得られ，購入態度から合理

表4　入学式の式服を着用した時の気分　(%)

項目／学科・系	服飾美術 N=64	スポーツ科学 N=154	養護保健 N=80	経営情報 N=56	総合教養 N=44	初等教育 N=127	合計 N=525
大人になったような気分になった	24(37.5)	76(49.4)	27(33.8)	22(39.3)	16(36.4)	58(45.7)	223(42.5)
晴れやかな気分になった	6(9.3)	4(2.6)	6(7.5)	7(12.5)	1(2.3)	9(7.1)	33(6.3)
厳粛な気分になった	0(0.0)	3(1.9)	1(1.2)	0(0.0)	0(0.0)	5(3.9)	9(1.7)
自由な気分になった	1(1.6)	2(1.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.8)	4(0.4)
引き締まった気分になった	26(40.6)	43(27.9)	30(37.5)	18(32.1)	16(36.4)	43(33.9)	176(33.5)
窮屈な気分になった	3(4.7)	11(7.1)	4(5.0)	7(12.5)	2(4.5)	6(4.7)	33(6.3)
ふだんと変わらなかった	3(4.7)	4(2.6)	7(8.7)	2(3.6)	5(11.4)	4(3.1)	35(6.7)
無回答	0(0.0)	1(0.6)	2(2.5)	0(0.0)	2(4.5)	1(0.8)	6(1.1)
その他	1(1.6)	0(0.0)	3(3.8)	0(0.0)	2(4.5)	0(0.0)	6(1.1)

表5　入学式に着用した洋服の活用法　(%)

項目／学科・系	服飾美術 N=64	スポーツ科学 N=154	養護保健 N=80	経営情報 N=56	総合教養 N=44	初等教育 N=127	合計 N=525
通学服として	1(1.5)	0(0.0)	2(2.5)	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)	4(0.8)
街着として	15(7.8)	3(1.9)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.3)	2(1.6)	11(2.1)
冠婚葬祭用の式服として	16(25.0)	55(35.8)	23(28.8)	14(25.0)	14(31.8)	34(26.8)	156(29.7)
就職時の会社訪問用のリクルートスーツとして	36(56.3)	70(45.5)	49(61.3)	31(55.4)	21(47.7)	80(63.0)	287(54.7)
卒業式の式服として	2(3.1)	21(13.6)	0(0.0)	3(5.4)	4(9.1)	6(4.7)	36(6.9)
無回答	0(0.0)	0(0.0)	3(3.7)	1(1.8)	1(2.3)	1(0.8)	6(1.1)
その他	4(6.3)	5(3.2)	3(3.7)	6(10.7)	3(6.8)	4(3.1)	25(4.9)

的な衣生活をこころがけ，個性化現象に動いていることが推察できた。

今回は'93年時と同様に，2件法の質問を独自型，同調型，目立ち型，堅実型，流行型，購入態度，その他の項目に概念分けをして考察をした。結果を表6に示す。

周囲の人と同じ服装をしていると落ち着くなどの同調型の質問項目（1，3，8，22）のすべてに対して‘あてはまらない’とした被験者が半数以上，自分の存在を服装で主張する方であるなどの目立ち型の質問項目（7，14，4，11）に対しても‘あてはまらない’とした被験者が半数以上，流行型の質問項目（16，6）に対しても‘あてはまらない’が多く'93年時と大きな変わりはなかった。

つぎに被験者の半数以上が‘あてはまる’とした項目は，洋服を購入するときは手持ちのものを考えてから購入が86.1%と最も多く，ついで洋服を購入するときは気にいるものを徹底的に探す，洋服を購入するときは良いと思ったらすぐ買う，自分に似合った服装であれば流行おくれであっても着る，ブランド商品はぜいたくだと思うなど，合理的で堅実的な衣生活をおくっていることがわかる。

つぎに'93年時との比較において，堅実型項目の‘あてはまる’としたパーセンテージが3項目とも上がっており，この原因として男子の存在が上げられると考え，堅実型の男女比率を

表6　入学生の服装感　(%)

	項　目 ／ あてはまる　あてはまらない	全体　N=525 1 あてはまる	2 あてはまらない
独自型	12. 購入しても多くの人が着ているのがわかると着るのが嫌になる	275 (52.4)	250 (47.6)
	15. 今までに誰も着用したことのない洋服を着たい	186 (35.4)	338 (64.4)
	21. 洋服を購入するときは他人が着ていないものを選ぶ	221 (42.1)	295 (56.2)
同調型	1. 周囲の人と同じ服装をしていると落ち着く	218 (41.5)	306 (58.3)
	3. 自分の好みでなくとも、他人にほめられたら着る	231 (44.0)	293 (55.8)
	8. 友達が着ている洋服と同じものが欲しくなる	209 (39.8)	316 (60.2)
	22. 洋服を購入するとき友人や店員に勧められるとその気になって買う	199 (37.9)	320 (61.0)
目立ち型	7. 自分の存在を服装で主張する方である	124 (23.6)	400 (76.2)
	14. 周囲の人をアッといわせるような目立つ服装をする	37 (7.0)	488 (93.0)
	4. 洋服のセンスには自信がある	69 (13.1)	452 (86.1)
	11. 自分はどんな格好をしてもよく似合うと思う	29 (5.5)	496 (94.5)
堅実型	19. 洋服を購入するときよいと思ったらすぐ買う	323 (61.5)	197 (37.5)
	9. ブランド商品はぜいたくだと思う	309 (58.9)	216 (41.1)
	10. 服装にお金をかけることは無駄なことだと思う	36 (10.7)	469 (89.3)
流行型	16. 流行の服は真っ先に取り入れる	123 (23.4)	401 (76.4)
	6. ブランドやメーカーにこだわるほうである	146 (27.8)	379 (72.2)
購入態度	20. 洋服を購入するとき友人や母親と一緒に行く	377 (71.8)	144 (27.4)
	17. 洋服を購入するとき自分一人で決めて購入する	315 (60.0)	207 (39.4)
	18. 洋風を購入するとき気に入るものがあるまで徹底的に捜して買う	382 (72.8)	139 (26.5)
	23. 洋服を購入するときは手持ちのものを考えてから購入する	452 (86.1)	69 (13.1)
その他の項目	2. プレゼントされた洋服は多少気に入らなくても着る	277 (52.8)	247 (47.0)
	5. 自分に似合った服装であれば流行遅れであっても着る	339 (64.6)	185 (35.2)
	13. リサイクルなどで安価な洋服を見つけて買う	243 (46.3)	281 (53.5)
	24. 洋服を購入するときは多少高価であっても、長年着られるものを買う	292 (55.6)	229 (43.6)

検討した。結果を表７に示す。ブランド商品はぜいたくだと思うが男子は123名全員が‘あてはまる’としており，他の１項目服装にお金をかけるのは無駄なことだと思うも男子が高く，堅実型は男子のほうが高い傾向にあった。また独自型の項目の‘あてはまる’率は'93年時よりも５～６％低く表出し，同調型の項目（3，8，22）については２～９％高く表出したことで，今回は独自性が弱まり同調性がやや強まったものと推測される。

さらに各科系ごとの特徴と概念の傾向を探るために，各概念ごとにその傾向の強い人と弱い人，すなわち各概念の全ての質問項目に‘あてはまる’とした人と，‘あてはまらない’とした人を抽出した。ただし堅実型の洋服の購入時に良いと思ったらすぐ買うという質問項目については，‘あてはまる’と‘あてはまらない’を入れ替えて抽出した。堅実型（合計17名）と目立ち型（合計７名）に対しては，各科系ごとのあてはまる人数がすくなかったために，有意差検定は行えなかった。独自型，同調型，流行型については危険率５％で有意差がみられ，その結果を表８に示す。独自型は14.7%，流行型は11.6%，同調型は9.1%と'93年時と比べると同調型と流行型が増え，独自型が４％ほど少なくなっている。また‘あてはまらない’とした非独自型は24.8%，非同調型は24.2%，非流行型は60.2%と'93年時よりも少なくなっている。独自型については服飾が36.5%と一位に多く‘あてはまらない’とした非独自型は総合教養系，初等教育学科が多い。同調型は経営情報が多く，服飾美術は非同調型の率が40.4%とかなり多いところから非同調型が多いと言えよう。流行型は経営情報系が21.3%と高く，初等教育学科は非流行型と言える。

以上の結果，入学生の服装感として，購入態度から学生は合理的で堅実的な衣生活を送っており，男子のほうが堅実的であった。また'93年時と比較した場合，今回は独自性が弱まり同調性がやや強まったものと推測される。各科系ごとの特徴として今回は服飾美術は独自的・非

表７　服装感―堅実型の男女比較

	2003年　調　査　結　果						'93年調査時	
	あてはまる			あてはまらない			あてはまる	あてはまらない
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	合計(%)	男性(%)	女性(%)	女子のみ	女子のみ
洋服を購入する時はよいと思ったらすぐ買う	323(61.5)	82(66.7)	241(60.1)	197(37.5)	41(33.3)	156(38.9)	665(55.1)	543(44.9)
ブランド商品はぜいたくだと思う	309(58.9)	123(100.0)	186(46.4)	216(41.1)	0(0.0)	216(53.9)	583(48.2)	626(51.8)
服装にお金をかけることは無駄なことだと思う	56(10.7)	28(22.8)	28(7.0)	469(94.5)	95(77.2)	374(93.2)	113(9.3)	1,096(90.7)

表８　入学生の服装感についての検定結果

		服飾美術 N=52	スポーツ科学 N=137	養護保健 N=79	経営情報 N=47	総合教養 N=38	初等教育 N=110	合　計 N=525
独自型	あてはまる	19(36.5)	18(13.1)	13(16.5)	4(8.5)	7(18.4)	16(14.5)	77(14.7)
	あてはまらない	9(17.3)	32(23.3)	18(22.8)	16(34.2)	15(39.5)	40(36.4)	130(24.8)
同調型	あてはまる	8(15.4)	8(5.8)	8(10.1)	7(14.9)	3(7.9)	14(12.7)	48(9.1)
	あてはまらない	21(40.4)	39(28.5)	22(27.8)	9(19.1)	6(15.8)	30(27.3)	127(24.2)
流行型	あてはまる	6(11.5)	22(16.1)	9(11.4)	10(21.3)	5(13.2)	9(8.2)	61(11.6)
	あてはまらない	35(67.3)	95(69.3)	48(60.8)	27(57.4)	27(71.1)	84(76.4)	316(60.2)

カイ２乗値　38.4　$p<0.05$

同調的な傾向，経営情報は同調的・流行型の傾向，初等教育は非独自的・非流行的な傾向にあった。服飾美術と初等教育は'93年時と同じ服装感が表出した。

5．日常着用している洋服についての考察

学生達は日頃どのような服装をし，衣服の好みはどのようなものであるか質問をした。“非常にそう思う”から“全く思わない”の5段階尺度での質問結果，評定値の高い項目を上げると“ジーンズやパンツをよく着るほうである”(4.54)，“ラフなスタイルをする”(3.99)，“ゆったりした動きやすい服装が多い”(3.89) などで，評定値の低かった項目は“ロングのフレアスカートをよく着る”(1.49)，“ミニスカートをよく着用するほうである”(1.56)，“キュロットスカートやショートパンツをよく着用する”(1.62)，“タイトスカートをよく着用するほうである”(1.78) であった。日常着として学生はジーンズやパンツを着用し，スポーティでラフなスタイルを好み，スカートは評定値の低いことからほとんど着用しない傾向にあることが分かる。'93年時の調査時と比較すると評定値の高い項目は同じであるが，低い項目として当時レースやフリル，リボンなどのドレッシイな服装項目が上げられ，スカートの着用項目はそれほど低いわけではなかった。

最近の服装傾向として，男性の女性化，女性の男性化あるいは服装のボーダーレス化などと言われており，その証としてスカート着用の減少が上げられた。

つぎに22項目の質問項目を変数に，525名の被験者を観測回数にして，各個人の相関係数行列を算出し，日常着用している洋服のタイプ分けをするために因子分析を試みた。結果を表9

表9　日常着用している洋服の因子分析結果

	項目／因子	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子
4	ミニスカートをよく着るほうである	0.706	−0.131	−0.008	0.030	0.059	0.042
5	レースのついたブラウスを着るほうである	0.621	−0.265	0.268	0.199	0.098	0.098
8	ロングのフレアースカートをよく着る	0.581	−0.176	0.021	0.249	0.118	0.118
10	タイトスカートをよく着用するほうである	0.694	−0.148	0.136	0.195	0.069	0.069
11	スカートはほとんど着用しない	−0.682	0.105	−0.187	0.141	−0.006	−0.006
1	スポーティな洋服を着るほうである	−0.770	0.758	−0.179	0.002	−0.045	0.057
6	ジーンズやパンツをよく着るほうである	−0.330	0.507	0.204	0.000	0.112	0.138
7	ゆったりした動きやすい服装が多い	−0.274	0.690	0.106	0.031	0.012	−0.052
9	ラフなスタイルをするほうである	−0.143	0.793	0.031	−0.102	−0.041	−0.083
13	ボーイッシュな雰囲気の洋服を着ることが多い	−0.960	0.694	−0.157	0.113	−0.091	−0.051
23	Tシャツ(トレーナー)とジーンズの組み合わせを着用することが多い	−0.013	0.565	−0.219	0.058	−0.167	0.154
2	フリルやリボンのついた洋服を着用するほうである	0.439	−0.132	0.535	0.070	0.222	−0.026
12	花柄や水玉などの曲線的な模様の洋服を着るほうである	0.279	−0.036	0.742	0.088	0.169	−0.012
15	柔らかく優しい雰囲気の洋服を着用することが多い	−0.048	−0.071	0.704	0.028	−0.272	0.057
19	可愛らしい洋服をきることが多い	0.414	−0.164	0.655	0.095	0.199	0.055
18	縞やチェックなどの直線的な柄の洋服をきる方である	0.100	0.174	0.291	0.519	0.048	0.054
20	Yシャツをよく着用することが多い	0.159	−0.053	0.037	0.669	−0.174	−0.002
22	自分の好みは人と違うような気がする	0.100	−0.014	−0.162	0.649	0.437	−0.009
14	シンプルですっきりした洋服を着ることが多い	−0.142	0.302	0.003	0.107	−0.677	−0.677
21	どこかに飾りがあるなど、凝ったデザインの洋服が好きなほうである	0.162	0.026	0.305	0.356	0.614	0.614
3	はっきりした色の洋服を着る方である	0.163	0.100	−0.232	−0.141	0.388	0.536
16	着用するスタイルは特に決まっていない	−0.115	−0.036	0.144	0.114	−0.105	0.808
	寄与率 (%)	13.521	10.281	9.874	8.212	6.878	5.926
	累積寄与率 (%)	13.521	23.801	33.675	41.888	48.166	54.692

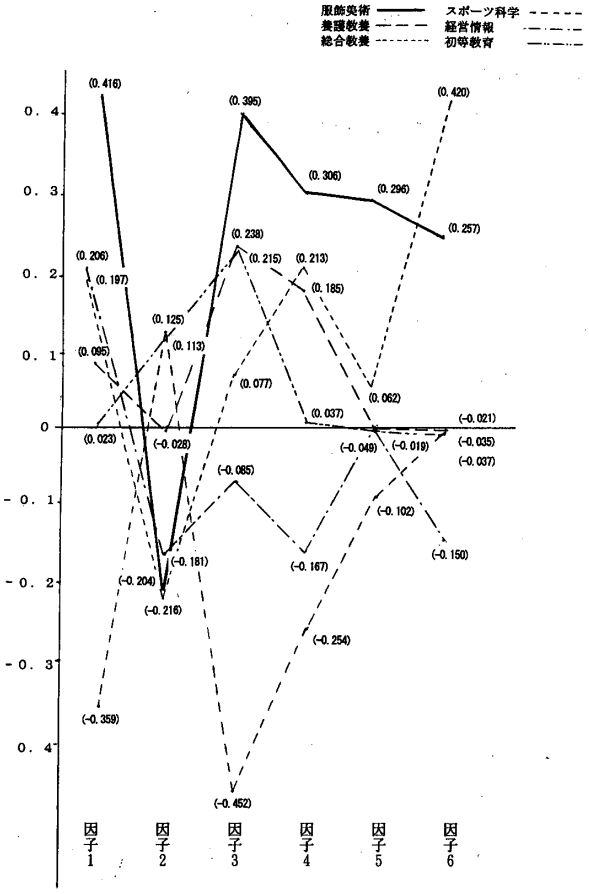

図2　日常着用している洋服の因子得点結果（平均値）

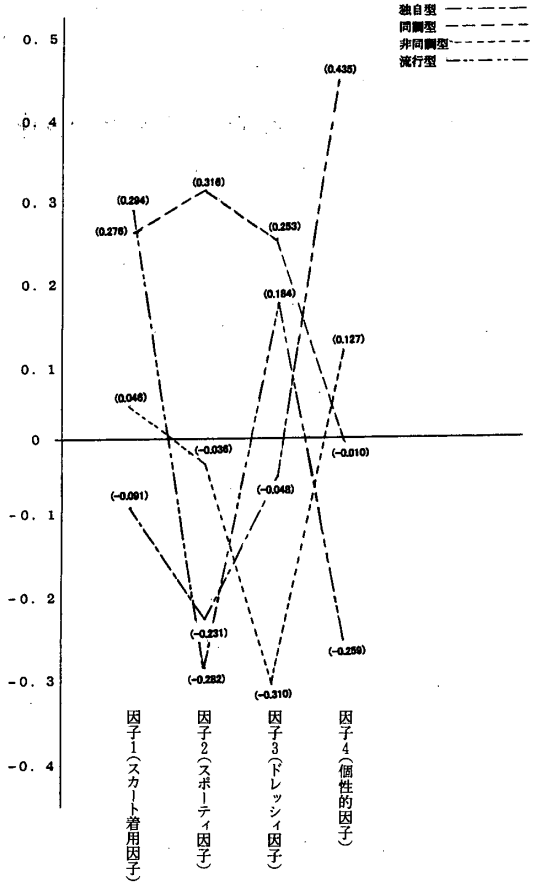

図3　服装感と着用実態との関連

に示す。因子の解釈をしやすいように主因子法，バリマックス回転を行い，個有値1.0以上で6因子抽出された。累積寄与率は54.69%である。抽出された因子負荷量をもとに因子の解釈を行った結果，第1因子は「スカート着用因子」第2因子は「スポーティ因子」第3因子は「ドレッシイ因子」第4因子は「個性的因子」と解釈した。5因子から6因子までは，項目数がすくないため因子としての解釈はできなかった。さらに，因子分析で抽出された各因子ごとの因子得点から，各科コースの因子得点の平均値を求め，各科コースの特徴を検討した。結果を図2に示す。第1の「スカート着用因子」で高く表出したのは服飾美術と経営情報，低く表出したのはスポーツ科学，第2の「スポーティ因子」で高く表出したのはスポーツ科学，低く表れたのは総合教養，第3の「ドレッシイ因子」で高く表れたのは服飾美術，低く表れたのはスポーツ科学，第4の「個性的因子」で高く表れたのは服飾美術，総合教養，低く表れたのはスポーツ科学，経営情報である。

これらの結果から，服飾美術の学生はスカートを着用することが多く，ドレッシイで個性的な洋服を着用する傾向であり，スポーツ科学系の学生はスポーティな洋服を着用し，スカートは着用せず，またドレッシイな洋服はほとんど着用しない傾向にあった。総合教養の学生はスカートを着用することがあり，やや個性的な洋服を着用する傾向，経営情報もスカートを着用することがあり，スポーティな洋服は着用しない傾向，さらに初等教育はドレッシイな洋服と

スポーティな洋服を着用する傾向にあることがわかった。

'93年時，服飾美術はスカートを着用し個性的な洋服を，初等教育学科は優しい雰囲気でシンプルな洋服を，体育コースはスポーティな洋服もドレッシイな洋服も着用していた。10年間で洋服のドレッシイさとスカート着用が微妙に変化していることがわかる。

6．日常着用している洋服と服装感との関連

つぎに着用している洋服の傾向と服装感との関連を検討した。表6に示した服装の概念の項目全てに‘あてはまる’とした人，すなわち概念に肯定的であり，その傾向の強い人を取り出した。また同調型の全項目に被験者の半数以上が‘あてはまらない’としたことにより，非同調の傾向の強い人も取り出し，主要4因子の因子得点の平均値を算出した。その結果を図3に示す。因子1のスカート因子に対して高く表出したのは流行型と同調型，因子2のスポーティ因子に対しては高いのは同調型，低いのは流行型，因子3のドレッシイ因子に対し，‘あてはまらない’で高いのは同調型，低いのは非同調型，因子4の個性因子に対して高いのは独自型，低いのは流行型であった。それぞれの因子ごとに概念の高低因子得点の平均値にt検定を行った結果を表10に示す。因子2，因子3，因子4の高得点者と低得点者間に危険率1％以上で有意差が認められた。因子2のスポーティ因子では同調型が高く流行型が低く表出したことから，

同調的な服装感を持つ人はスポーティな洋服を着用るす傾向にあり，流行型の服装感をもつ人はスポーティな洋服を着用しない傾向にあると思われる。同様に因子3のドレッシイ因子でも高いのは同調型であり，低いのは非同調型であることから，同調的な服装感を持つ人はドレッシイな洋服を着用する傾向にあり，非同調的な服装感をもつ人はドレッシイな洋服を着用しない傾向にある。

また因子4の個性的因子で高く表出したのは独自型で，低く表出したのは流行型であることから，独自型の服装感をもつ人は個性的な洋服を着用する傾向があり，つぎに高いのは非同調

表10　服装概念と着用実態との関連（因子得点の平均値）

		独自型	非独自型	同調型	非同調型	流行型	非流行型	平均値の差の検定結果（t値）		
因子1	人数	77	130	48	127	61	316			
	因子得点平均値	−0.091	0.021	0.276	0.046	0.294	−0.093			
	標準偏差値	1.141	0.922	1.013	1.054	1.239	0.923			
因子2	人数	77	130	48	127	61	316	流行型		
	因子得点平均値	−0.231	−0.024	0.316	−0.036	−0.282	0.107	&(2.976)**		
	標準偏差値	1.109	1.056	0.994	1.099	1.059	1.005	同調型		
因子3	人数	77	130	48	127	61	316	非同調型	非同調型	非同調型
	因子得点平均値	−0.048	0.047	0.253	−0.310	0.184	−0.125	&(3.311)**	&(3.047)**	&(2.910)**
	標準偏差値	1.144	1.000	1.088	0.961	1.176	0.938	同調型	流行型	非独自型
因子4	人数	77	130	48	127	61	316	非独自型	非独自型	
	因子得点平均値	0.435	−0.219	−0.010	0.127	−0.259	0.0738	&(4.566)***	&(2.859)**	
	標準偏差値	1.096	0.925	0.747	1.007	0.999	0.990	独自型	非同調型	

** $p < 0.01$

*** < 0.001

型でこの服装感を持つ人も個性的な洋服を着用する傾向にある。流行型の服装感を持つ人はスカートを着用し，個性的な洋服を着用しない傾向にあることがわかった。

以上のことから，同調型の服装感を持つ人はスポーティな洋服とドレッシイな洋服を着用する傾向にあり，独自型の服装感を持つ人は個性的な洋服を着用する傾向にあり，非同調的な人はやや個性的な洋服を着用し，ドレッシイな洋服は着用しないことがわかった。また流行型の服装感をもつ人はスカートを着用し個性的な洋服は着用しない傾向にあった。

'93年時と比較をすると独自型の服装感の人は今回も全く同様な結果，同調型，非同調型流行型の服装感の人達はほぼ同様の結果が得られた。

7．仕事に対する姿勢と服装感との関連

社会に出る一歩手前の学生がどのように仕事をとらえ，将来に対するビジョンをもっているのか，働く目的と仕事に対する姿勢について質問をした。なお仕事に対する姿勢については，将来変わる可能性もあるが，現在の自分の考えに近いものを選択して貰った。働く目的については2項目を，仕事に対する姿勢については1項目をそれぞれ選択してもらった結果を表11，12，13に示す。

表11　働く目的

項目/各科系	服飾美術 N=64	スポーツ科学 N=154	養護保健 N=80	経営情報 N=56	総合教養 N=44	初等教育 N=127	合 計 N=525
経済的にゆとりのある生活をするため	42(62.6)	103(66.9)	65(81.3)	45(80.4)	34(77.3)	67(52.8)	356(67.8)
社会的にえらくなるため	1(1.6)	2(1.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(1.6)	5(0.9)
仕事をとおして自分の人格を成長させるため	16(25.0)	27(17.5)	11(13.8)	3(5.4)	7(15.9)	37(29.1)	101(19.2)
企業の発展に尽くすため	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.8)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.1)
仕事をとおして自分の能力をためすため	4(6.3)	13(8.4)	2(2.5)	3(5.4)	2(4.5)	11(8.7)	35(6.7)
人に尽くすため	0(0.0)	4(2.6)	1(1.3)	1(1.8)	1(2.3)	5(3.9)	12(2.3)
社会に貢献するため	0(0.0)	2(1.3)	0(0.0)	1(1.8)	0(0.0)	1(0.7)	4(0.7)
その他	0(0.0)	2(1.3)	1(1.3)	1(1.8)	0(0.0)	4(3.1)	8(1.5)

表12　仕事に対する姿勢　（男子学生）　(%)

項目/各科系	服飾美術 N=5	スポーツ科学 N=48	養護保健 N=2	経営情報 N=5	総合教養 N=0	初等教育 N=7	合 計 N=67
条件(給料、その他)が悪くても好きな仕事なら続ける	2(40.0)	25(52.1)	1(50.0)	2(40.0)	0(0.0)	3(42.8)	33(49.3)
条件(給料、その他)がよければ嫌な仕事でもがまん出きる	0(0.0)	5(10.4)	1(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(14.3)	7(10.4)
自分の才能を伸ばすためにつぎつぎと転職をする	0(0.0)	1(2.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.4)
条件(給料、その他)がよければ転職をする	1(20.0)	5(10.4)	0(0.0)	2(40.0)	0(0.0)	1(14.3)	9(13.4)
自分の才能を生かして起業家(会社経営)になりたい	2(40.0)	6(12.5)	0(0.0)	1(20.0)	0(0.0)	1(14.3)	10(14.9)
同じ仕事は一生続ける	0(0.0)	6(12.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(14.3)	7(10.4)

表13　仕事に対する姿勢　（女子学生）　(%)

項目/各科系	服飾美術 N=44	スポーツ科学 N=41	養護保健 N=64	経営情報 N=30	総合教養 N=6	初等教育 N=81	合 計 N=266	'93調査時
仕事は一生続ける	12(27.3)	9(22.0)	16(25.0)	9(30.0)	1(16.7)	10(12.3)	57(21.4)	216(17.8)
仕事は結婚までの一時的なものでよい	6(13.6)	3(7.3)	1(1.6)	4(13.3)	0(0.0)	3(3.7)	17(6.4)	133(11.0)
こどもが生まれたら仕事はやめる	5(11.4)	5(12.2)	9(14.1)	4(13.3)	1(16.7)	9(11.1)	33(12.4)	227(18.8)
こどもに手がかからなくなったら再び仕事をする	16(36.3)	24(58.5)	35(54.6)	11(36.7)	3(49.9)	54(66.7)	143(53.8)	617(51.1)
その他	5(11.4)	0(0.0)	3(4.7)	2(6.7)	1(16.7)	5(6.2)	16(6.0)	16(1.4)

(1) 働く目的と仕事に対する姿勢について

経済的にゆとりのある生活をするためにが67.8%と最も多く，つぎに仕事をとおして自分の人格を成長させるため19.2%，仕事をとうして自分の能力をためすため6.7%であった。各系とも多いのは経済的にゆとりのある生活であり，働く意識としては10年前と変化はみられず，むしろ不景気を反映しているのか，経済的にゆとりのある生活をするためのパーセンテージが上がっていた。しかし初等教育学科は他系のなかで最も低く表れ，仕事をとおして自分の人格を成長させるためを選択しているのが他系よりも多い。これも10年前と同じ結果である。初等教育学科は幼児教育と初等教育に携わる目的学科であり，学生は教育に携わることで，人格の成長につながることと思っていることが推察できる。

つぎに仕事に対する姿勢については，男子と女子では仕事に対する考え方に相違があると考え，男子向けと女子向けにわけて質問をした。それは，男子が仕事をすることは社会通念上当たり前のこととされている。しかし女子は男女雇用均等法ができ，社会進出は著しく増加しているものの，仕事と結婚・出産・育児という人生の選択とを考えねばならない時期があり，仕事を続けることが社会的通念にはなっていない現状があるためである。

仕事に対する姿勢では男子学生は，給料その他の条件が悪くても，好きな仕事なら続けるが49.3%と約半数，つぎに多いのは自分の才能を生かして起業家になりたいが14.9%と自分に向いている仕事を第一に考えていることが読みとれる。

女子学生はこどもに手がかからなくなったら再び仕事をするが53.8%で半数以上，次に仕事は一生続けるが21.4%，こどもが生まれたら仕事はやめるが12.4%であった。現在の母親はパートを含め何らかの形で仕事をもつ人が増えているためか，女子学生は仕事を一生続けるとした人を含めると，実に75%の人が社会に出て仕事をしたいと考えていた。

また各科系ごとの相違ををみると，こどもに手がかからなくなったら再び仕事をするが初等教育学科が高く，こどもの教育期間は家庭にいるという初等教育職の学生の特徴が表れていた。仕事は一生続けると再び仕事をするを合わせると初等教育学科80%，スポーツ科学80.4%，養護保健79.7%と高いキャリア志向がみられた。

この仕事に対する姿勢を'93年時と比較をすると，仕事は一生続けるが４%，再び仕事をするが２%増え，こどもが生まれたら仕事はやめるが６%減，結婚までの一時的が５%減と10年間で女性が仕事をする方向へと増加している。また各科系の比較においても初等教育，養護保健は'93年時と同様に仕事をするすキャリア志向が高く表出しているが，今回スポーツ科学の学生にもキャリア志向が高く表れた。

(2) 仕事に対する姿勢と服装・服装感についての関連

服装はしばしばその人の印象形成や自己表現の手段として用いられるが，仕事に対する意識の違いがどの程度服装に表れるのであろうか。仕事に対する姿勢と日常着用している洋服との関連を検討した。そのため仕事に対する姿勢の質問項目の一生仕事を続けるとした53名ととこどもに手がかからなくなったら再び仕事をする134名を取り出し，日常着用している洋服で抽

出された各因子の因子得点の平均値をもとめ，普段着用している洋服の傾向を調べた。結果を表14に示す。仕事は一生続けるとした人は第４因子が高く，第３因子がマイナスであり，こどもに手がかからなくなったら再び仕事をする再就職の人は第３因子が高く第４因子がマイナスであったことから，仕事を一生続ける人は普段個性的な洋服を着用し，ドレッシイな洋服は着用しない傾向にあり，再び仕事をするとした再就職の人はドレッシイな洋服を着用し，個性的な洋服は着用しない傾向にあることがわかった。さらにこの２者間に服装感の相違が認められるかどうかを検討する目的で，２件法で回答された服装感の質問項目を各概念ごとに分け，平均度数を算出した。平均度数を四捨五入しχ^2検定を行ったところ危険率0.1%で有意差が認められた。結果を表15に示す。２者ともに流行型にたいしては‘あてはまらない’が多く，仕事を一生続けるとした人で半数以上の度数を獲得したのは独自型の‘あてはまる’が53.8%，同調型の‘あてはまらない’が69.3%で仕事を一生続ける人の服装感は，独自型で非同調型と言えよう。つぎにこどもに手がかからなくなったら再就職をするという人は半数以上の度数獲得から非同調，非独自型と言うことが出来る。

以上の結果から仕事を一生続けるとしたキャリア志向の人は，個性的な洋服を着用し，服装感は独自的な傾向であった。また学生の中で多くを占めた再就職型の人はドレッシイな洋服を着用する率が高く，非同調，非独自的な服装感をもつ傾向にあった。

’93年時は，仕事を一生続けるとしたキャリア志向の人はスポーティな洋服と個性的な洋服

表14　仕事に対する姿勢と日常着用している洋服との関連

		第1因子		第2因子		第3因子		第4因子	
	人数	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
仕事は一生続ける	53	0.075	1.008	0.036	1.087	-0.026	1.246	0.262	1.148
こどもに手がかからなくなったら再び仕事をする	134	0.052	0.862	0.082	1.008	0.193	0.851	-0.031	0.939

表15　仕事に対する姿勢と服装感との関連　(%)

	質問項目	仕事は一生続ける N=57		こどもに手がかからなくなったら再び仕事をする N=142	
		1.あてはまる	2.あてはまらない	1.あてはまる	2.あてはまらない
同調型	周囲の人と同じ服装をしていると落ち着く	19 (33.3)	38 (66.7)	62 (43.4)	80 (55.9)
	自分の好みでなくとも、他人にほめられたら着る	15 (26.3)	42 (73.7)	60 (42.0)	82 (57.3)
	友達が着ている服装と同じものが欲しくなる	19 (33.3)	38 (66.6)	57 (39.9)	86 (60.1)
	洋服を購入するとき友人や店員に勧められるとその気になって買う	17 (29.8)	40 (70.2)	64 (44.8)	77 (53.8)
	平均度数	17.5(30.7)	39.5(69.3)	60.8(42.5)	81.3(56.8)
独自型	購入しても多くの人が着ているのがわかると着るのが嫌になる	35 (61.4)	22 (38.6)	71 (49.7)	72 (50.3)
	今までに誰も着用したことがない洋服を着たい	28 (49.1)	29 (50.9)	47 (32.9)	96 (67.1)
	洋服を購入するときは他人が着ていないものを選ぶ	29 (50.9)	28 (49.1)	57 (39.9)	83 (58.0)
	平均度数	30.7(53.8)	26.3(46.2)	58.3(40.8)	86.3(58.5)
流行型	流行の服は真っ先に取り入れる	12 (21.1)	45 (78.9)	35 (24.6)	107 (74.8)
	ブランドやメーカーにこだわるほうである	11 (19.3)	46 (80.7)	28 (19.6)	115 (80.4)
	平均度数	11.5(20.2)	45.5(79.8)	31.5(22.1)	111 (77.6)

カイ２乗値 30.570

P<0.001

を着用する傾向があり，服装感は非流行，非同調的な傾向であったが，今回の調査からは着用する洋服は個性的で独自的な服装感をえることかできた。服装感が独自的な人は自分らしいこだわりを持った個性的な洋服を着用することはごく当然のことと思うが，それがキャリア志向の人に表出したということは，前回の10年前よりも自分の生き方や自己を服装で表現していると意識している人がキャリア志向に増えたということが出来よう。

女子学生の中にキャリア志向が増加したのは，従来の「男は仕事，女は家事」に代表される性役割分担に対して，男女のジェンダー（社会的性）が以前ほど明確ではなくなっている今日の社会的背景が上げられる。土肥[8]はこのジェンダーが明確ではないジェンダーフリーの社会は，人々の被服行動に影響を及ぼし，男女の区別のない洋服，女性はスカートよりもパンツルックや女性的なフェミニンなものよりも活動性を重視し，がっちりしたデザインや素材が好まれると解説している。今回の調査で学生はスポーティでラフなスタイルを好み，スカートの着用が低く表れたことはジェンダーフリー社会の実証になった。また服装感については'93年時は非同調・非流行的な傾向にあり個性化現象に動いていたものが，今回は非同調・非流行的な傾向の中にも，独自性が弱まり同調性がやや強まったものと推測出来たが，これは若者のファッションの選択基準に起因すると考えられる。「ＦＡ流行誌」[9]は，団塊ジュニア世代の消費志向の特徴として，若者はものを選択する基準に，自分の好き嫌いよりも友人がどのように思うかの比重が大きく，自分が所属するグループの好みに同調する形で，その中での微妙な違いを意識すると説明している。

Ⅳ 要　　約

入学式の式服についての実態，日常着用している洋服と服装感との関連，および仕事に対する姿勢と服装との関連について1993年調査時との比較検討を行った結果，つぎのことが明らかになった。

① 式服のイメージの測定から，落ち着いた，すっきりした，改まった，新しいの形容詞に高い評価がみられ，'93年当時よりも公的ながやや高く表出していた。'93年の調査時には体育コースの学生は女子ばかりであったが，式服のイメージはスポーティで男っぽく捉えられていおり，今回の調査でのスポーツ科学は半数以上が男性であるにも関わらずスポーティでラフな式服という同様な結果となり，専攻する分野が同じであると，性別に関係なく同じイメージをもつ服装をすることが伺えた。

② 式服の着用実態から，着用していた服種として上げられるのはスーツ，ブレザーとスカート，パンツの組み合わせが多く，アクセサリーとしてはペンダント，ネクタイをつけていた。このスーツの平均金額は22,353円，ブレザー14,318円，スカート10,927円，パンツ13,189円であった。礼装としてのスーツ着用は過去２回の調査から当たり前になっていることがわかった。スーツの色は黒が38.8%と最も多く，次はグレー，紺色の順位である。ワンピースは白，

ブレザーは黒とグレーが同率で，スカート，パンツはともに黒色が多かった。また上着の下に着るＴシャツは白が多く，全体的には様々な服種に黒，白，グレーの無彩色の傾向がみられた。

③　服装感を探る質問項目の回答結果から，独自型，同調型，目立ち型，堅実型，流行型，購入態度とに概念分けをして考察をした。入学生の服装感として，購入態度から学生は合理的で堅実的な衣生活を送っており，男子のほうが堅実的であった。また'93年時と比較した場合，今回は独自性が弱まり同調性がやや強まったものと推測される。各科系ごとの特徴として服飾美術は独自的・非同調的な傾向，経営情報は同調的・流行型の傾向，初等教育は非独自的・非流行的な傾向にあった。服飾美術と初等教育は'93年時と同じ服装感が表出した。

④　日常よく着用する服装については，評定値の高い項目から，日常着として学生はジーンズやパンツを着用し，スポーティでラフなスタイルをしていることがわかった。また評定値の低い項目からスカートはほとんど着用しない傾向にあることが分かった。つぎに主因子法・バリマックス回転の因子分析を実施した結果，個有値1.0以上，累積寄与率は54.69％で６因子抽出され因子の解釈を行った。第１因子は「スカート着用因子」，第２因子は「スポーティ因子」第３因子は「ドレッシイ因子」第４因子は「個性的因子」とした。さらに各因子ごとの因子得点の平均値から，各科系の特徴を検討した結果，服飾美術の学生はスカートを着用することが多く，ドレッシイで個性的な洋服を着用し，スポーツ科学系の学生はスポーティな洋服を着用し，総合教養の学生はスカートを着用することがあり，個性的な洋服を着用する傾向，経営情報もスカートを着用することがあり，初等教育はドレッシイな洋服とスポーティな洋服を着用する傾向にあることがわかった。'93年時と比較すると，各科系で基本的には変化はないものの，洋服のドレッシイさとスカート着用が微妙に変化していることがわかる。

⑤　日常着用している洋服と服装感との関連では，服装感の概念の強い人と弱い人を取り出し，主要４因子の因子得点の平均値を算出し有意差検定を行った。その結果同調型の服装感を持つ人はスポーティな洋服とドレッシイな洋服を着用する傾向にあり，独自型の服装感を持つ人は個性的な洋服を着用する傾向にあり，非同調的な人はやや個性的な洋服を着用し，ドレッシイな洋服は着用しないことがわかった。また流行型の服装感をもつ人はスカートを着用し個性的な洋服を着用しない傾向にあった。

'93年時と比較をすると独自型の服装感の人は今回も全く同様な結果，同調型，非同調型流行型の服装感の人達はほぼ同様の結果が得られた。

⑥　女子学生の仕事に対する姿勢では「仕事を一生続ける」と「こどもに手がかからなく再就職をする」を合わせると75％になり'93年時よりも増加していた。服装との関連では，仕事を一生続けるとしたキャリア志向の人は，個性的な洋服を着用し，服装感は独自的な傾向であった。また学生の中で多くを占めた再就職型の人は，ドレッシイな洋服を着用する率が高く，非同調，非独自的な服装感をもつ傾向にあった。

'93年時との比較ではキャリア志向の人の着用する洋服は同じであるが，服装感が非流行，非同調的な傾向から独自的な傾向へと変化していた。

参 考 文 献

1）アクロス編集室：ストリートファッション1945-1995－若者スタイルの50年史－，パルコ出版，p182-245，2002

2）佐野千佐他：北海道女子短大1983入学者の服装に関する調査，北海道女子短大研究紀要，第17号，p1-16，1983

3）高岡朋子他：北海道女子短大1993年入学者の服装についての調査－着用実態と服装感および仕事に対する姿勢との関連－，第30号，p17-34，1993

4）総務省統計研修所編：第53回日本統計年鑑－平成16年度－，日本統計協会，p616-618，2003

5）内閣府編：国民生活白書　デフレと生活－若年フリーターの現在－，ぎょうせい，p28-31 2003

6）熊本日日新聞：平成元年10月４日掲載

7）渡邉芳道：流行色傾向分析に関する研究－'87AW～2000AWパリコレクションの色彩傾向－，東京家政大学研究紀要　第41集（１），P147-155，2001

8）土肥伊都子：被服行動におけるクロス・セックス化，繊維消費科学会誌，VOL39，№11，P36-41，1998

9）伊藤忠ファッションシステム編：ＦＡ流行誌，VOL25，26　伊藤忠ファッションシステム，1997